

話すということ ピエール・ブルデュー著

ソシユールに始まる構造言語学は人文諸学のモデルとして、民俗学、文芸批評さらには記号学などの領域で広く利用されてきた。フランスを震源地とし、日本の文学語学研究でも隆盛となってきたこの潮流に対して、本書は正面きった批判を展開する。

著者の論鋒は挑発的だ。ソシユール派言語学は、構造の発生機構のダイナミズム解析を自らに禁じてしまう。また、チョムスキーの生成文法は、言語能力なるものを、文法的誤謬から保護された理想的な話者に帰属させたため、理論的にしか存在しえない架空言語の研究に埋没した。さらに言語哲学者オースティンは、強制力を伴う発言を「遂行的言表」として抽出したが、その強制力の由来をひたすら言語内部に探すという過ちを犯している…。それならば、言語にはいかにして権力が宿るのか。著者はこの問いにこう答える。つまり、あるグループの代表者の発言には力が授けられるが、この力を代表者に授けたのは、その代表者が力を及ぼすことになる、当のグループそのものなのだ、と。

例えば標準語を教育制度によって日本全体に普及し、方言を追放しようとする場合を考えてみよう。この強制は一見国家権力による横暴のようだが、それが効を奏するのは、標準語の支配を受ける国民がその支配を正統かつ正当なものと認めるからにほかならない。国民はそうとも知らぬまに、正統言語の支配を容認し、推進する共犯者となっている。そうでなければ、そもそも共通語は正統な国語として普及することも出来ないはずなのだ。

被支配者による支配への無意識的迎合を組織する、このネズミ講顔負けのからくり。その分析には、カントーロヴィチの『王の二重の身体』や、中世キリスト教神学に言う「聖職の神秘」の錬金術、マックス・ヴェーバーの預言の社会学、カントの「本源的直観」や、カッシーラーの象徴的な「かたち」の哲学が援用される。

言語には社会的現実を言語に沿って構築するという、神的「魔術的な権能」が備わっている。それを著者は通過儀礼の代わりに制定の儀礼と呼ぶ。そして社会科学や哲学は、とかくそうした魔術的能力に「科学」の装いを纏わせ、恣意的な社会操作を学的真実の名のもとにまかり通らせる。ハイデガー哲学やアルチュセール派マルクス主義にその悪しき典型を見いだす著者は、そうした偽れる科学性の修辞を「モンテスキュー効果」と名付ける。

フランスきっての知の暴れん坊ブルデュー。原書公刊のおりにおおきな反響を呼んだその辣腕、毒舌が、いかに日本で各方面からの批判、攻撃に晒されるか。その反応も楽しみである。

30年、稲賀繁美訳、藤原書店、352頁(4,400円) / ▼ Pierre Bourdieu

30年、フランス生まれ。コレージュ・ド・フランス社会学講座教授。